



全国共同制作オペラ 東京芸術劇場シアターオペラvol.15

團伊玖磨／歌劇『夕鶴』(新演出)全1幕(日本語上演 英語字幕付き)

指揮：辻博之 演出：岡田利規

Ikuma Dan Opera “YUZURU”

演出 岡田利規 インタビュー

私たちは何に心を支配され、生きているのか

『夕鶴』に、岡田利規が新たな光を当てる。

「私たちは何に心を支配され、生きているのか」——主人公・つうが突きつけるその問いに、観客は何を思うか。

岡田利規が、初のオペラ演出に挑む。演出は、木下順二の戯曲を團伊玖磨がオペラ化し、これまで幾人もの演出家が手がけてきた『夕鶴』。しかし岡田自身はそういった作品の“背景”に対する気負いはなく、本作を「手垢がついた物語ではありますが、実は今を生きる我々にとって大事な問題を問いかけることができる、そういったポテンシャルがある作品だと思います」と冷静に分析する。

今回岡田は、オペラ『夕鶴』のルールに則って、テキストには一切手を加えず、劇中劇として物語を立ち上げる。8月に熊本で行われたワークショップでは、テキストを用いた稽古が行われ、さらに舞台美術の模型を使いながら岡田が俳優やスタッフに演出プランを説明した。模型では、現代的な部屋の中央に、素朴な日本家屋のセットが置かれ、これまでの“民話の世界観”の「夕鶴」とは明らかに違う様相となっている。美術の中村友美と岡田が本格的に組むのは今回が初となるが、「いわゆる『夕鶴』の世界では一ミリもない、今の我々が生きているこの場所を舞台に設定したい、ということから中村

さんと話を始めました」。ほかには衣装の藤谷香子、照明の高田政義と岡田作品に関わりの深いスタッフが多数、名を連ねる。

さらに気になるのは、TABATHAの岡本優と工藤響子の存在だ。岡田は、「つうを、資本主義的なものに毒される前のイノセントな存在として捉えるのではなく、資本主義を通り抜けてそれを乗り越えたような“ゴージャスな存在”にしたい。だからカッコいいダンサーに舞台上にいてほしいと思ったんです(笑)」と構想を明かす。

観客を“与ひょう化”し、突きつける

近年の岡田作品では、ラッパーのOtagiriと組んだ「アウトラップ(いかにも音楽的な語りのなかにもキラリと饒舌なシナリオ)」や、内橋和久が音楽監督・演奏、七尾旅人が謡手として出演した「未練の幽霊と怪物—『挫波』『敦賀』—」など、作品における“音”の重要性がどんどん高まっている。『夕鶴』の楽曲からはどんなことを感じているのか。「それがオペラの音楽の機能だ、ということなのか、『夕鶴』の音楽はとても

物語だな、物語に全面的に奉仕しようとしているなど感じます」

そんなオペラの楽曲が描き出す『夕鶴』の物語を、岡田は「与ひょうは観客である」という目線で、観客と結びつける。「このプロダクションでは、『観客を与ひょう化する』という言い方をするんですけど(笑)、観客はつうを可哀想に、と眺める存在ではなく、むしろつうから“射られる”というか、キツイ問いを向けられる対象だと捉えたい。それによって、この作品が問いかけてくる、“私たちは何に心を支配され、生きているのか”という問題が、観客であるあなた自身にとっても重要な問題であるということを示唆できると思うんです」と岡田。「未練の幽霊と怪物」に続き、今回も観客は傍観者であることが許されない作品となりそうだ。そこには岡田の、「舞台芸術って愛でるものではなくて、すごく力があるものだと思う。その力を、毎回“その場”で証明し続けたいと思っています」という信念が、太く貫かれている。

取材・文：漂(演劇ライター)



Okada Toshiki



2021年10月30日 ② 14:00開演
コンサートホール 詳細はP8へ

指揮：辻博之
演出：岡田利規
出演：
つう 小林沙羅
与ひょう 与儀巧
運ず 寺田功治
惣ど 三戸大久

ダンス：岡本 優(TABATHA)、工藤響子(TABATHA)
子供たち：世田谷ジュニア合唱団(指導：掛江みどり)
管弦楽：ザ・オペラ・バンド

特設サイト：<https://opera-yuzuru.com/>



Tsuji Hiroyuki
指揮



Kobayashi Sara
つう(ソプラノ)



Yogi Takumi
与ひょう(テノール)



Terada Koji
運ず(バリトン)



Sannohe Hirohisa
惣ど(バスバリトン)



Okamoto Yu
ダンス



Kudo Kyoko
ダンス

和製オペラの名作への挑戦

歌劇『夕鶴』は、原作者、木下順二が戯曲『夕鶴』のテキストを変えないことを条件に作曲を承諾したことで生まれた作品。1952年の初演以降、国内外で度々上演され、上演回数はゆうに800回を超える。民話「鶴の恩返し」をもとにした戯曲『夕鶴』が、叙情的な美しいメロディーと、明快なライトモチーフを用いて彩られる。

團伊玖磨没後20年、節目の年となる今回、演出を担うのは、現代演劇の旗手として国際的に創造活動を行う演出家・岡田利規。歌劇『夕鶴』を、古き良き時代のノスタルジックな民話としてではなく、現代人にとって切実な物語として捉え直し、21世紀に生きる者にリアルに響く新しい『夕鶴』の誕生に挑む。